



❀ 奈良文化財研究所創立60周年

奈良文化財研究所は、文化庁の前身である文化財保護委員会の附属機関として1952年4月1日に設立されました。本年度で還暦、創立60周年の節目を迎えます。

研究所創設の契機は、奈良県を視察した吉田茂首相が、南都諸大寺に伝わる文化遺産の重要性と保護の必要性を痛感し、奈良に美術学校もしくは美術研究所を設置する構想をもったことによると伝えられています。その意を受けた文化財保護委員会は、文化財の宝庫である奈良の地で、専門を異にした研究者が実物に即した総合研究をおこない、その研究成果を文化財の保護行政に役立てる目的で奈文研を設立しました。

創設時は、奈良市春日野町に所在した県立商工館を庁舎に、美術工芸研究室（彫刻・工芸・絵画）、建造物研究室（建物・遺跡庭園）、歴史研究室（古文書・考古）、庶務室の4室体制、定員15名という小さな組織で発足しました。この商工館は、1902年に奈良県物産陳列所として建築史家関野貞が設計した由緒ある近代和風建築で、庁舎移転後の1983年に重要文化財となり、現在は奈良国立博物館の仏教美術資料研究センターとして使われています。草創期の3研究室は唐招提寺をはじめ、西大寺、秋篠寺等の総合調査を実施し、大安寺や薬師寺では南大門・中門跡の発掘調査をおこないました。

その後、国土開発の波が奈良にも押し寄せると、平城宮跡や藤原宮跡の保存問題を契機として、1963年に平城宮跡発掘調査部、1973年に飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設置されました。また、国土開発に起因する埋蔵文化財問題に対処するため、1974年に埋蔵文化財センターが設置され、1975年には飛鳥保存に関する閣議決定に基づき飛鳥資料館が開館しました。こうして業務の中心が次第に

発掘調査や埋蔵文化財の分野に移っていき、予算や定員も増加しましたが、1980年には美術工芸研究室が奈良国立博物館に新設された仏教美術資料研究センターに移管され、美術史部門を失ったことが惜しまれます。

現在の奈文研は、企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター、事務局としての研究支援推進部、展示施設としての飛鳥資料館からなり、平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査をはじめ、文化財の保存・修復、遺跡の整備活用手法の実践的研究、新たな文化財類型である文化的景観の調査研究等、文化財の学際的、総合的な調査研究に取り組んでいます。また、これまでに集積した知識や経験を海外の文化財の保護と修復に役立てる国際支援事業の機会も増え、文化財をめぐる諸外国との共同研究や国際学術交流も活発化しています。

また、近年の最大の変革点としては、国の行政改革による独立行政法人化を挙げなければなりません。2001年に東京文化財研究所と統合して独立行政法人文化財研究所となり、2007年には国立博物館と統合して独立行政法人国立文化財機構の一施設となりました。さらに本年1月には国立美術館・日本芸術文化振興会との統合が閣議決定され、2014年度から新法人に移行することになりました。このように目まぐるしい組織・制度の改変と予算削減が研究所の日常業務を圧迫していますが、今後も文化財の地道な調査研究を通して、日本文化の形成の過程や特質をあきらかにし、国内外に日本文化の素晴らしさを発信していきたいと考えています。

今年度の60周年記念事業としては、秋を中心に日中韓国際講演会（なら100年会館）、国際共同研究成果の展覧会（飛鳥資料館）、東京講演会、60周年記念式典等、各種行事を計画していますので、皆様のご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

（所長 松村 恵司）